

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06351

研究課題名(和文) 朝鮮漢文学との交渉を中心とする近世日本漢詩史の再検討

研究課題名(英文) Re-examining Middle Japan Sinitic Poetry History Focusing on the Interactions with Korean Sinitic Literature

研究代表者

康 盛国 (KANG, SUNG KOOK)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：00756455

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は、朝鮮通信使と日本の文人との間で行われた漢詩文交流を考察することを通して、日朝間の文人たちの交流の裏面にあった様々な意識を明らかにすることができた。1719年に朝鮮通信使として日本を訪れた申維翰と唐金梅所との漢詩交流の分析を通しては、中国古文辞派詩風の影響が日朝間において共通項として作用していることが確認できた。また、新井白石『白石詩草』中の「自鳴鐘」詩の分析を通して日本の文明に対する白石の自負心および朝鮮に対する対抗意識を読むことができた。さらに、申維翰が日本の文人に宛てた漢詩に自作の再利用があったことを明らかにし、通信使たちの創作環境が劣悪だったことへの傍証とすることができた。

研究成果の概要(英文)：Through observing the exchange of Sinitic poetry between the Japanese literati and Joseon mission diplomats, various conscious internal interactions between Japanese and Korean literati was made clear. It was confirmed that the influence and usage of Classic Chinese poetic style was mutual between Japan and Korea through analyzing the Sinitic poetry exchanged between KARAKANE Baisho and SHIN Yuhan, who visited Japan as a part of Joseon missions in 1719. Also, by analyzing 'Jimeishsho;' in ARAI Hakuseki's Hakuseki Shiso, Hakuseki's confidence in Japanese culture and opposition toward Korea can be understood. Furthermore, it was made clear that SHIN Yuhan reused his own works in poems sent to Japanese literati and the poor creative environment for the diplomats was able to be corroborated.

研究分野：日本近世文学

キーワード：漢詩 朝鮮通信使 申維翰 新井白石 唐金梅所

1. 研究開始当初の背景

17～18世紀の日本漢詩壇に関する従来の研究は、中国からの詩論の輸入と日本国内における自生的な発展といったように、中国と日本間の影響関係のみに留まっている。たとえば、揖斐高氏は18世紀における日本漢詩壇の動向について、盛唐詩への擬古主義を主張する中国の古文辞派の文学理論が荻生徂徠(1666～1728)によって日本においても拡散し、18世紀半ばの日本の漢詩壇を席捲したと記述している(『江戸詩歌論』汲古書院、1998年)。日本における古文辞学の流行の淵源が中国にあることは異論の余地のないことであるが、当時の日本にとって最も緊密な関係をもっていた隣国・朝鮮が考慮されていないのは、分析として不十分な点がある。朝鮮は、中国の思想・文化に大きく影響されるという点において日本と同様であり、朝鮮の漢詩壇の動向との比較は、日本漢詩壇の固有の特徴を究明するために必要な作業である。

2. 研究の目的

本研究は、17～18世紀の日本漢文学について、朝鮮文人との交流・影響関係や朝鮮漢文学との比較という新たな視点から分析し、国際的に共有可能な評価と意義を見出そうとするものである。江戸時代(以下、近世と言う)には12回にわたって朝鮮通信使が来日しており、日本の儒学者や漢詩人たちは、彼らと漢文による筆談や漢詩唱和を行うなど、朝鮮文人の文学観や学術・知識と接触した。その交流は古文辞派と呼ばれる古典主義的な詩論の浸透などに影響を与えている。従来の近世日本漢文学は、もっぱら中国からの影響という点から考えられてきたが、韓国における最新の研究の成果なども視野に入れつつ、朝鮮という考察の軸を導入することによって、東アジアにおける漢文学の意義が、より立体的に捉えられるようになると考えら

れる。

3. 研究の方法

朝鮮通信使の来日時になされた漢詩交流に関する事象のなかで、詩論の展開と関わる事象を分析し、日朝漢詩壇の影響関係を究明する。具体的には以下のことを分析する。

『白石詩草』が朝鮮の文人たちに高く評価された原因

申維翰の唐金梅所漢詩評の内実

4. 研究成果

申請者は当初、朝鮮通信使たちとの交流を調査することで、これが日本の古文辞学隆盛において及ぼした影響を明らかにしようとした。しかし、日本の詩論および学問の隆盛における影響を究明するという目標には至らなかった。その代りに、日本の新井白石および申維翰が日韓交流においてどのような意識をもって臨んでいたかについて興味深い事例をみつけることができた。以下、申請者によって明らかになった事例を述べる。

A. 『白石詩草』(正徳2年 1712 刊)は、18世紀初頭に江戸幕府の儒官として活躍した新井白石の詩 99 首を収録した漢詩集である。『白石詩草』が編まれる過程については李元植『朝鮮通信使の研究』(思文閣出版、1997年)に詳しい。同書では「白石はこの詩草を対馬の雨森芳洲に送り、正徳度(1711)の朝鮮信使が対州に到着するやいなや、直ちにそれを信使に示し、序跋を求めさせた。(中略)白石はかねてから、漢詩をもって信使を圧倒させてみせるという自信に満ちていたとみえる」(前掲書 p.241)と述べ、この詩草が編まれた背景に文事をもって朝鮮通信使を圧倒しようという白石の意図があったと主張する。

申請者は、白石のこのような意図を考慮しつつ『白石詩草』の第一首目として収録された「自鳴鐘」を分析した。「自鳴鐘」は、

漢詩の形式としては五言古詩（32句）、内容としては、自鳴鐘の外観・構造・鐘の音などを、中国の故事を盛り込みながら描写したものである。本詩は、『白石詩草』の中でもっとも長い詩であり、また漢詩の間に自鳴鐘の構造を説明するための自注をつけている。これは、同詩草の他の詩には見られない独特な形式といえる。また、人間関係における情あるいは自然景観についての感興など、いわゆる伝統的なテーマを詠んだほかの収録詩とは違って、人間の技術に関わるものを素材としたという点で、同詩草のなかで異彩を放つものである。

さて、自鳴鐘は西洋からの宣教師が来日の際に持ち込んだものであるが、日本固有の時刻体系（不定時法）に合わせて改良した日本製の時計が白石の時代には流布していた。白石の「自鳴鐘」の語句を分析すると、彼が詠んでいるものが、日本製の時計であることが分かる。またこの詩は中国の故事を多用することで、西洋からもたらされた機械文明の産物の中に、古代中国の理想的な世界を見出そうとしている。つまり、この詩において、自鳴鐘が西洋文明からもたらされた発明品であることを匂わせる表現は見出せない。むしろ古代中国の故事を多用することで、古代中国のイメージと結びつけている。たとえば、自鳴鐘の鐘とそれを支える銅柱を、漢の武帝が長寿のために作らせたという承露盤（それを支えていた銅製の高い柱）と金茎にたとえているのである。

このようなことを踏まえて、白石が「自鳴鐘」詩を詩集の冒頭に収録した背景に、この詩集の第一読者であった朝鮮からの使節たちにむけて日本の技術力および自身の詩才を誇示しようとする意図があったことが推定される。

B. 申請者は朝鮮通信使の日本使行中の詩文唱和において朝鮮側がどのような立場で

臨んでいたか、申維翰の自作の再利用の問題を中心に調査および検討した。享保四年（1719）に製術官として通信使使行に参加していた申維翰は、泉南の大商人である唐金梅所に詩文を送っており、その詩文は『梅所詩集』という板本を通して確認できる。その詩文の中に「鼓琴歌」と題した作品があるが、これは申維翰が朝鮮において作った自作を一部再利用したものであることが申請者の調査を通して明らかになった。「鼓琴歌」は申維翰が朝鮮の李敬哉という人に宛てた「醉歌行」という詩とかなり随時している。一致する語句を文字数で数えたら108文字（全二十二句）が一致しており、語句が一致する箇所の配列も、概ね一致している。「醉歌行」の成立時期が定かではないが、状況からみて「醉歌行」が先で、「鼓琴歌」がそれを再利用したものと、推定される。

このような事例は詩文の専門家である申維翰でさえ自作の再利用を強いられるほど、通信使たちは納得のいく創作が難しい状況におかれていたことを如実に見せてくれる。申維翰は『海游録』において日本の文士との唱和の多忙さを吐露しており、納得のいくよい句がないことが苦しいとも述べている。このような問題意識は後の宝暦度の製術官・南玉の記録『日観記』にも表れている。南玉は、劣悪な状況の中で詩文の唱和をするしかないことの問題点を3点指摘し、詩文唱和の有り方を見直すべきだと主張している。

朝鮮通信使・とくに製術官たちは日本人との詩文の唱和を通して「国を輝かす」という期待および使命感を帯びて派遣されていた。しかし、実際の唱和の場面においては、凡作を量産するしかないという状況にジレンマを感じていたのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

康盛国、「雨森芳洲文庫蔵『三宅滄溟筆談集』の考察——三宅家三代の通信使接応時の類似性を中心に——」、『朝鮮学報』237 輯、2015 年 10 月、pp.79～101

KangSungkook, *WESTERN CIVILIZATION AS EXHIBITED IN A SINO-JAPANESE POEM FROM THE EDO PERIOD: AN ANALYSIS OF ARAI HAKUSEKI 'S POEM "AN ALARM CLOCK"*, 'Annals of the Faculty of Foreign Languages and Literature' ("Dimitrie Cantemir" University, Romania), 2016.7

〔学会発表〕(計5件)

康盛国、「日朝漢詩交流の場における古文辞派の存在——申維翰の日本漢詩批評を例に——」、『和漢比較文学会 西安特別例会(中国、西北大学)、2015 年 8 月

KangSungkook, *Western Civilization as Exhibited in a Sino-Japanese Poem from Edo Period: An Analysis of Arai Hakuseki 's poem "Alarm Clock"*, *discerning the intention of the Poet*, JAPAN - PREMODERN, MODERN AND CONTEMPORARY (ルーマニア、“Dimitrie Cantemir” Christian University), 2015.9

康盛国、「『白石詩草』に表れた白石の意図——「自鳴鐘」詩の分析を通して——」、『朝鮮学会 第 66 回(天理大学)、2015 年 10 月

康盛国、「新井白石『白石詩草』の考察」、『東アジア比較文化国際会議 第 13 回(韓国、中央大学校)、2016 年 8 月

康盛国、「通信使使行中の詩文唱和における朝鮮側の立場——申維翰の自作の再利用をめぐって——」、『日本近世文学会秋季大会、2016 年 11 月 13 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

康 盛国 (KANG, Sungkook)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：00756455